

## 地方だより

### 仙台管区気象台



青葉城から仙台平を望む

伊達政宗が青葉山に築城、千代せんぢの名を仙台と改め町割を行ない、仙北岩出山にあった家臣、町民を移住させたのが今から360年前のこと、奥州62万石の雄藩として13代270年仙台は藩政の首都として栄え、明治2年の藩籍奉還でその幕を閉じている。

青葉城は市の西方青葉山の中腹にあり、樅の木は天をおおうばかり、当時のおもかげの一つである。その木蔭から仙台を足下に奥州21郡太平洋をへいげいしている政宗の像が見える。もちろんその独眼の中には立ち並ぶ建物の中に管区のレーダー塔や観測塔も見える。

さて仙台に市制がしかれたのが明治22年、急速に都市づくりが進められ軍都学都としての様相を呈し、大正15年10月石巻測候所仙台出張台が現在の管区の位置に設置された。次来20年にして仙台測候所、地方気象台、管区と成長を遂げたが、この間の急なるは雑然たる庁舎が物語っており、創設当時の庁舎はいま構内南東隅で悠雲寮として若き職員のびの寮にあててある。

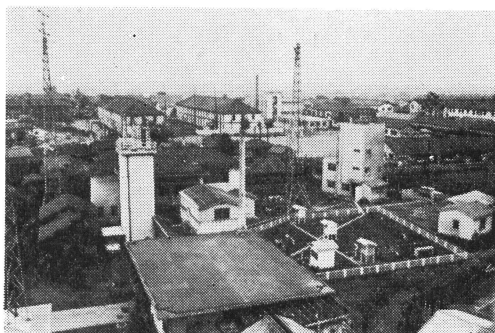
野蒜測候所は東北の気象事業の嚆矢で、その後明治22・3年の洪水、23年の三陸大津波、33年の東北地震、35、38年の凶作、43年の洪水、大正2年の凶作、昭和8年の三陸大津波、9、16、20年の凶作その他宮城県災異年表は枚挙にいとまなき程の記録を残している。

この様な災害は我々諸先輩のパイオニア精神を刺激しない筈はなく、昭和15年の三陸沿岸に対する津波警報の樹立、17年の凶冷研究室の設置、季節予報の研究のほっ興となり、由来津波と長期予報とは仙台管区の二大テーマとなっている。

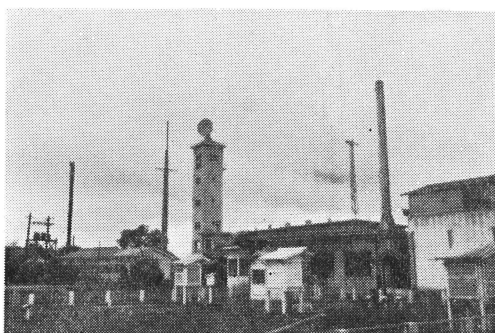
災害はまた救済するところとなり、これが東北振興、今日の東北開発につながるものだが政府が関東、関西、中京への手をさしのべるに急なるに及び明治半ばから、大正、昭和初期への半世紀、つづく戦時体制の強化と東北は全く取り残されたが、昭和25年アメリカ TVA 方式にのっとる国土総合開発政策の採用によって、東北の未開発資源が急にスポットを浴びることとなり必然的に水理水害問題が我々業務の中に取り入れられた。

他方気象事業の近代化、国際化に伴う業務の充実、社会の進展に伴う気象利用、防災、マスコスの強力な接近など業務は増加と高度化の一途をたどっている。加えて今度は仙台湾地区が新産業都市地域に正式指定される運びにあり、奇しくも貞山運河はこの動脈的位置をしめ、再び政宗の遺産が省みられることになった。新産業都市は我々にも直接間接に投影することとなろうが、その成長は尽きるところを知らないものがある。

(佐藤道司記)



レーダー塔から見た雑然たる管区庁舎  
上方建て物は旧四連隊兵舎



露場からレーダーを望む